

第3回 新型コロナウイルス感染症対策危機克服会議 全体会議 議事要旨

- 日 時 令和2年11月12日(木) 13:00~15:10
- 会 場 オンライン開催 (Zoom)
- 参加者 別添出席者名簿のとおり

冒頭に主催者挨拶及び府の担当者より各分野での課題認識や施策の方向性について現時点での報告を行い、その後、意見交換を行った。

<議事要旨>

(1) 分野別会議での施策の方向性について各委員からの意見の共有

1. 商店街・小売業

- ・物を売る以外の付加価値が今後さらに重要となる中で、京都の“程良いおせっかい感”を含んだ接客力はとても高い。小売業は全てに通じる入口のような存在のため、京都全体をアピールする立ち位置となることがよいのではないかと。
- ・商店街で大学生などをインターンとして受け入れ、取組を任せることで関係人口を増やすようなことができるとよいのではないかと分野別会議で議論していた。そのことにより、大学生などが商店街での実績を就職に繋げたり、自己実現の場としたりすることで、卒業後もつながり続けることができるのではないかと。
- ・商店街では、地域住民と商店街の関係性の取りまとめから始まり、学生や主婦などに加え、高齢者もパソコン等のわからないことを聞きに来るなどして、コミュニティが出来ているところもある。
- ・商店街のIT化は今後、リテラシーの高い人がそうでない人を引っ張り上げていくように進めることで、商店街の良さ、店主の魅力、ストーリーのある商品などを世界に発信するという形を取りたい。
- ・人材を商店街に引き留めるためにパイロットショップのようなところで挑戦してもらおうという形ができるとよいと考えている。

2. ものづくり関連産業

- ・京都府の企業はほとんどが零細企業なので、行政としてプラットフォームを提供し、安価な受益者負担で利用可能な仕組みができるとよい。また、人材育成に関して、他業界から家業を継ぐ人のための教育プラットフォームを作ることで人材育成の問題を支えることが必要である。
- ・企業の横の連携により、知恵を共有し合い、企業がデザインをするような機会を作る必要があるのではないかと。

- ・現在ある業界のこだわりを捨て、産業の壁を越えて挑戦していくことが、この IoT 化していく社会における企業の考え方やスタンスであると考えている。
- ・海外との往来が自由にできなくなってから、全ての装置をリモートメンテナンスができるようにしたり、早い技術革新に対応するための現地技術者の教育についての課題に対し、各国の技術者を京都に集めて再研修を始めたり、今後の海外拠点での研修事業に向け、営業職にも新技術の教育やオンラインでの PR 方法、販促資料の整備などが行われている。
- ・全事業所での Web 環境の整備、リアルタイムに話ができるシステムの導入、承認手続きの撤廃や電子印・電子承認への切り替えが行われている。

3. 伝統産業

- ・呉服業界では、市場の縮小、消費減退の中、新型コロナウイルス感染症の影響により根源的な課題が一気に噴出した状況となっており、生産インフラにかかる職人の高齢化に加え、後継者を育成するところではない危機的状況にある。
- ・伝統産業全般では、ニーズの変化に対応することがより一層求められている。旧態依然のシステムが全く通用しないという状況なので、新たに構築していく必要がある。
- ・ものづくりのスタンスと、流通の改革が課題。加えて、既存の小売・流通では、合理的な消費者のニーズに応えることができていないことも課題である。
- ・伝統と産業を一緒にしてしまっていることが課題ではないかと議論している。伝統として守るべきところ、産業として収益を上げるところを切り分けて議論する必要があるのではないかと。
- ・海外、特にヨーロッパでは、文化ビジネス（文化をビジネスに変えていく）の様々な事例がある。外から学び、京都の中で定着させていく取組が重要である。その中で、現状分析をし、人材育成の問題や収益の確保に取り組むことが大切だと考えている。

4. 観光関連産業

- ・人が移動することで生み出される文化的・経済的・社会交流的価値を観光がもたらしめている側面から考えると、人の移動やそれに付随するものや情報の流れをどのように組織し直すことが重要ではないかと考える。
- ・人の流れが不均衡なので、人の流れを調査し再構成する仕掛けづくりが肝要ではないか。プラットフォーム等 IT を使った分析や仕掛けが重要であることに加え、観光産業に関わるステークホルダー同士のつながりの中での試みや成功事例の共有が重要になると考える。
- ・京都府民が京都の魅力を再発見することが、新たな魅力づくりに重要なので、ゲ

ーミフィケーション等をうまく取り入れた施策が実施できないかと分野別会議でも議論していた。

- ・9月以降、感染防止をしながらのツアーが再開されているが、発売後すぐに完売となっている。外出自粛後、外へ出るツアーを企画すると参加者が集まるという、今までにない大きな変化が表れている。生活そのものが観光になりつつあるが、外国人は以前からそのような傾向があり、生活の部分を大切にしていたようである。
- ・観光を入口として地域振興を図るだけではなく、町の特徴や紹介、住む場所の提案も視野に入れながら、新しいチャレンジをする準備をしている。

5. 食関連産業

- ・飲食業はマスクを外すことや三密になりやすいことから新型コロナウイルス感染症の感染リスクが高いため敬遠される傾向が強い。特に最近では、大人数での利用が躊躇されている。
- ・人によって許容できる基準が異なるため、正しい知識とルール・基準づくりが重要であり、そのような取組も進んでいる。
- ・食品産業では、家庭で使わないような少し高めの食材やこだわりを持って作られた食材などが低迷している。
- ・コロナ社会対応ビジネスモデル創造事業補助金の採択事業は、生活様式の変化への対応としての新業態の立ち上げやブランド価値の向上、食文化の新たな提案、商品開発、中食・内食に対するシステムづくり等の新しい発案に対する採択が多く、農業生産者は少なかった。
- ・農業では、気候変動などの問題で例年と同じ品質のものが確保できず、加工や販売等の業者にも影響が出ている。お茶は、特に物販部分で厳しい状況が続いている。
- ・食分野では、エシカル消費や健康、安全に対する部分が大きな注目点となっている。長い研究や様々なバックグラウンドが必要となるので、産学含めての連携が後押しとなるのではないかと。

(2) 分野横断での意見交換

- ・観光は他の分野と連携しやすい。商店街を見学するツアーや工場巡り、伝統産業館を含めたツアーは好評である。食体験そのものも観光だと考えている。
- ・京都館という京町家では、すだれを出す時期や夏布団を干す時期等の京都の生活の仕方を教えてくれ、それが観光コンテンツになっている。京都のブランド力は高く、それらをぜひ自信を持って観光コンテンツとして提供いただきたい。
- ・「プラットフォーム」という言葉が複数の分野から挙がっていたが、最近よく言

われる「プラットフォーム共同体主義」（大企業が作ったプラットフォームでは一方的に搾取される構造ができやすいため、様々なステークホルダーがオーナーシップを持ったプラットフォームを作っていくという考え方）は、公的な場としてのプラットフォームとして適切なのではないか。また、各分野横断的な部局があると早く進むのではないか。

- 小売分野でも観光との連携が注目されており、体験を作るリテールツーリズムなどがある。京都の場合、特に深いところをきちんと伝えることが必要である。例えば、金継ぎ技術は修理部分をあえて目立たせることで愛着を湧かせるという日本独自の精神性を外国人に説明すると感動される。
- 発信したいものに対して、興味がある人のみが引かかるようなフィルタリングで、意味のあるつながりを作る設計を各分野でできるとよいと考えている。
- 観光とものづくりで、京都に来た際、京都の素晴らしい企業を見学したいというのは可能だと考えている。
- 商店街も観光面ではポテンシャルを秘めている。リカレント教育に力を入れており、機会があれば第二の人生として商店街にお店を出したいということもあるので、体験型あるいは商店街の奥底まで見せるような観光を一緒にやりたい。
- 新型コロナの感染拡大による抹茶のインバウンド需要の減少により、業界を挙げた輸出促進を考えている。BtoC で京都のオリジナルに近いものを届ける仕組みづくりを、伝統産業や観光と連携して実施していく必要がある。
- 伝統産業は、特に、若い人にとって魅力ある職業でなければならないと考えている。どうすれば楽しくなるのか、どう変革をしていくか、これまでにない商品の可能性を追求していく必要がある。帯や着物というフォーマットでのものづくりから、違った形で織物や染物の持つ可能性を追求していきたいと考えている。
- 産業を超えた連携として、ワーケーションのデジタル化を航空会社や旅行会社と実施しており、IoTやウェアラブルなどの技術で、旅行中の動線やストレスのデータを出し、気持ちや体調変化の追跡を行っている。
- 海外大手 IT 企業の動きに対して、京都らしさや日本らしさでどのように対抗していくかを考えると、このような場での知恵の結集と実施が必要だと考えている。
- 一番大切なことは、連携する人それぞれの想いや温度感が同じことが大切である。また、リーダーシップや推進力のある人がまとめることで、想いや温度感はある程度修復することが可能となる。また、発信先のターゲットも大切で、考えるべきことは様々あるが、まずは進めて、自分たちも楽しめそう、面白そうなものを発信していくことが大切だと考えている。
- 連携には賛成であるが、背景や立場の異なる人々が繋がっていくには、具体的な事例などを示して進めていくことがよいのではないかと考えている。